宗高凧

●宗高凧の特徴

宗高凧は、大井川町宗高の提灯屋・池谷錠さんが大正初期から作り始めた物で、主な型に二種類の特徴があります。

ひとつは小型で「木版筆彩武者凧」と呼ばれる、駿河凧風のもの。静岡市周辺で作られる駿河凧と同様に、下方左右が三角に張り出した変則五角形で、絵柄の輪郭を版木を使って墨で刷ってから、これに筆で色をつけていきます。この版木は明和年間（一七六四～一七七二）に彫られたといわれ、焼津市二色の伊勢松さんの木版凧の版木、大井川町下小杉の伊之助さんの木版凧の版木を譲り受けたもので、今でも池谷家に大切に保管されています。絵柄は義経、加藤清正などの武者絵が多く、中には鶴亀のものも見られます。木版画凧絵は、使い古した版木の素朴な線質と、無造作に見える彩色に何か親しみを感じさせ、全国的にみても特異で独創的な「木版筆彩武者凧」として珍重されています。

もうひとつは大型の角凧で、祝い凧として使われたブカ凧（相良型）です。この凧は版木を使わない手描きの凧で、その形や大きさから障子凧とも呼ばれています。絵柄は義経、弁慶、大石内蔵之助、牛若丸、那須の与一、鶴亀などで、その生き生きとした筆使いが、古くから男の子の初節句の祝いに使われたわけを物語っています。この他に奴凧なども作られました。

●宗高凧の歴史

■宗高凧の系譜

◆初代・池谷仲蔵（一八五九～一八九九）

宗高凧（障子型の手描きのもの）　宗高凧（駿河型）

本業の提灯製造の傍ら、芝居にも興味を持ち、中村一座に加わる。

◆二代目・喜市（一八八〇～一九五二）

仲蔵の長男で池谷家を継ぎ、中村一座に加わる。

◆三代目・錠（一八九四～一九七五）

仲蔵の次男。芝居の一座「岸村屋」を設立し、女形役者としても活躍。大正初期、提灯屋・池谷分家として独立し、宗高凧のもととなる版木を譲り受け、凧の製造も手掛けはじめる。

◆四代目・準市（一九〇九～一九六三）

喜市の長男で池谷本家を継ぐ。「新興劇団清水二郎一座」を設立。

◆五代目・光（一九三七～）

準市の次男。映画の看板職人に刺激され、上京。経験を積み、アトリエを設立。昭和三十七年帰省し、看板屋を始める。父・準市の没後、提灯製造も手掛ける。